

## 弁論部

高46期 戸村 智憲

私が入部した頃、弁論部は“遺跡”であった。うららかな春、“桃園の契り”を交わし、高46期生となった私は、クラブ紹介の冊子の中に、たった1行の記述を見た。

「弁論部・只今部員はおりません。」

他の部が華麗なPRを繰り広げるのに対し、この寡黙な“遺跡”は、雄弁にも私の心を擱んだ。古びていて、ほこりまみれになろうとも、決して朽ちない革張りの古書のように、閉ざされた時をそっと今に開き満たしてみたい、という思いにかり立てられ、入部したのだった。

全くゼロからのスタートと言ってよかった。部員もおらず、部費もない。どうしたものかと頭を抱えていた時、当時は文化部の巢窟であった生徒会館の一隅から、優勝カップらしきものが発掘された。私はそれを預かった。どろどろに汚れ、取っ手ははずれ、紅白のリボンが褐色に染まっていた。丹念に汚れを落として磨き上げ、刻印らしき溝をなぞっていくと、「校内辯論大会」の文字が浮かんできた。こうして、埋没していた過去が、今日の光を受けて再び輝きを取り戻した。ここで、弁論部の歴史の一つと直面することになった。

弁論部の歴史に欠かせない背景が、文芸会または文学会にある。明治32年より、定期的で開催され、そこでは演説会が行われていた。内容は、社会問題が中心で、次第に戦時色を帯びたものになっていったそうだ。それはさておき、特筆すべきは、本校では軍国主義下にあっても比較的言論も自由であった。現在の自由とは多少の差はあっても、このこと自体、大変意義深く、弁論部にとって貴重な下地であったことに間違いはない。

戦後、各部が復活する中で、「文化国日本を作ろう」をスローガンに、多くの文化部と共に、昭和22年我が部が誕生した。同年の秋には、戦後初の校内弁論大会が開催され、午後の授業をカットして夕方まで行われるという盛会であった。当時大阪の（旧制）中学校では、ディベート（1チーム3人で、予め定められたテーマについてくじ引きで肯定または否定の立場にわかれて討論を行い、勝敗を決する）や、雄弁大会が数多く開催され、弁論熱は高まっていたのである。26年に開催された校内弁論大会では、当時のお金で賞品総額2千円程度が計上され、実に思い切った熱の入れようであった。（この時のカップが、先に述べたものである。）

部の運営は、そうそう順調な時ばかりではなかったようだ。部の存続にかかわる程の、不調の時代もあったと聞く。しかし、そういった波を乗り越え、関西高校選抜雄弁大会・全国高校弁論大会（4位）・全大阪青年弁論大会（3位）・全大阪高校弁論大会（日本国連協会杯獲得）等、先輩部員の栄光ある足跡をみるに至る。部員数は格別多くはないながらも、精選された強さを発揮してきたのである。このような大会の他にも、校内での討論会

や、他校との交流討論会をはじめ、文化展示発表会（以後文展と呼ぶ）のような文化行事でも、日頃の努力の成果を実らせていった。

こうした歴史をもつ“知られざる遺跡”の存在を知らしめつつ、その再建に努めることとなった。活動の足がかりとして、歴代校長の訓話が収められた『天高名論集』のテープを拝聴することから始めた。中でも市川速男元校長先生の話術の素晴らしさや、題材（映画『E・T』を基にお話しなされたことがあった）の選び取り方のうまさは、印象深く残っている。他には、発声練習、歴史的人物の話術研究や、ディベート技術の研究等をした。

初の発表の場となる文展に向けては、泊まりがけで琵琶湖－淀川水系の環境汚染調査を行い、これを基に演説の原稿を作り上げた。地道な活動が実ってか、文展の演説会では、3回の発表のいずれもが満席となり、あふれた聴衆が窓越しにずらりと並び聞き入るありさま。更に、当初は予定外だった討論会も、有志の熱い思いを受け、急きょ開催の運びとなった。言葉への不信の時代で、大学でも弁論部の存在そのものが危ぶまれる中、高校での弁論部の復活は、極めて意義深いものであろう。

最終的には、他の部にひけをとらぬ部員数に回復した。4期連続で文化委員長を輩出したり、文化機構の中核メンバーとなったりして、部員全員が文化面の諸改革のキーパーソンとなっていった。こうして我が部は、草木に覆われた“遺跡”から、再び天高文化の牙城となった。

天高文化の浮沈は、弁論と共にある。天中時代からの弁論熱の高さや、天高時代に移ってからも、文化部全体の活性化が叫ばれる度に、校内弁論大会が開催されてきたこと等がそのことを証明している。我が校の文化の一層の発展のために、弁論を司る我が部は、再び“遺跡”と化すことなく、木鐸としての役割を担う必要がある。

また、社会的にも、弁論はますます重要となってくる。昨今、表面化してきた様々な社会問題に対し、我々が投げかけるべきものは、石や火ではなく、言葉による問題提起や、建設的批判であるはずだ。

我が校が「賢人精神」ではなく、「野人精神」を継承する限り、弁論部は、決して「死せる野人の会」ではなく、オピニオン・リーダーとして、これからも輝き続けていくことと信じている。



校内弁論大会の優勝カップ

**桃陰百年**

**大阪府立天王寺高等学校創立100周年記念誌**

平成8年（1996年）11月17日発行

編集・発行

**大阪府立天王寺高等学校**

**創立100周年記念事業委員会 記念誌委員会**

〒545 大阪市阿倍野区三明町2-4-23

TEL (06) 629-6801 (代)

印刷

**綾田印刷株式会社**

〒542 大阪市中央区谷町7-1-53

TEL (06) 762-9212 (代)